

〔資料〕

学部ゼミナールにおける経営学教育の方法と実践

工場見学・英語教育・論文作成とインターゼミナール (3)

洞 口 治 夫

はじめに

1. ゼミナールの年間計画と意図
2. 専門英語教育
(以上, 第43巻第3号)
3. レポートと論文の添削
(以上, 第43巻第4号)
4. インターゼミナール
結語と課題
(以上, 本号)
4. インターゼミナール

学部のゼミナールが、他大学のゼミナールと研究成果を報告する機会を設けることをインターゼミナールと呼ぶ。洞口ゼミナールがインターゼミナールを開始したのは2000年からである。工場見学や英語テキストの輪読に比較すると、比較的最近の試みであり「もっと早く始めておくべきであった」と考える教育方法である。それだけに、もしも、まだインターゼミナールを開始していないとすれば、本稿の読者である大学教員の方々には薦めたい教育方法である。けっして大げさな言い方ではなく、ゼミナール運営において、唯一最大の効果がある教育方法を挙げるとすれば、インターゼミナールの開催を挙げたい。

インターゼミナールを開始したのは、2つほどの理由があった¹⁾。

第一は、1999年の4年生が卒業論文の概要を洞口ゼミナールのなかで発表し、それがたいへんに優れていたことがある。すでに彼ら・彼女らは法政大学の懸賞論文で入賞していたが、プレゼンテーションも非常に優れていた。その能力を相対的に評価する場として、他大学の学生と交流する機会を与えたいと考えた。法政大学学生に応募資格の限定された懸賞論文でトップに立っていること

が立証されたとしても、「井の中の蛙」となっていないとも限らない。

第二は、1999年から科学研究費補助金の申請をして共同研究を開始していた法政大学・福田淳児教授(当時・助教授)が、3大学によるインターゼミナールの効果を教えてくれたことがある。福田教授の大学院時代の同窓生が教員となり、ゼミナールを担当するようになって、相互に発表を行っている、という話を伺った。その楽しさを福田教授から教えて頂いた記憶がある²⁾。

青山学院大学

第15表には、2000年から06年までのインターゼミナールの記録をまとめた。

2000年に青山学院大学経済学部の深川由紀子ゼミナールとインターゼミナールを開始した。深川ゼミナールにインターゼミナール開催を依頼した理由はいくつかある。

第一は、法政大学経営学部と青山学院大学経済学部とでは、大学受験の偏差値がほぼ同等であり、学生の参画意識を高めるのではないかと考えた。大学生の抱える偏差値へのコンプレックスは深刻であり、偏差値に差があり類似した校風の大学を選定すれば、「この大学を落ちました」と言う学生が必ずおり、一度負けた相手への再チャレンジといった様相を呈してしまう。インターゼミナールの目的は、そうした心理的な復讐にはない。別の表現をすれば、インターゼミナールによって報告を行ったときに、報告水準の格差が生まれにくいのではないかと考えたためでもある。

第二は、深川助教授(当時)の研究領域が韓国経済論であり、国際経営論を研究テーマとする洞口ゼミナールと研究テーマとして重なりあっているのではないかと、想像したことがある。

第15表 インターゼミナールの経験

	2年生	3年生	4年生
2000	なし	なし	青山学院大学 深川由紀子ゼミナール
2001	なし	なし	青山学院大学 深川由紀子ゼミナール
2002	宝仙短期大学 井沢直也ゼミナール	青山学院大学 深川由紀子ゼミナール	慶應義塾大学 高橋美樹研究会
2003	宝仙短期大学 井沢直也ゼミナール	慶應義塾大学 高橋美樹研究会	青山学院大学 深川由紀子ゼミナール 藤村学ゼミナール
2004	武蔵大学 板垣博ゼミナール	慶應義塾大学 高橋美樹研究会	東京大学 藤本隆宏ゼミナール
2005	上智大学 竹之内秀行ゼミナール	慶應義塾大学 高橋美樹研究会	東京大学 藤本隆宏ゼミナール
2006	上智大学 竹之内秀行ゼミナール	慶應義塾大学 高橋美樹研究会	東京大学 新宅純二郎ゼミナール 上智大学 ハグリアン・バリッサゼミナール

(出所)筆者作成。

第三は、経済企画庁や経済産業省など、官公庁の研究所が主催する研究会や学会活動などを通じて深川助教授と知己があったことである。なお深川ゼミナールとのインターゼミナールは、深川助教授が東京大学教養学部へ転出したことに伴って2003年度をもって終了した³⁾。

宝仙短期大学と武蔵大学

2000年当時、インターゼミナールの感想についてアンケート調査を行うことはしなかったため、その満足度についての客観的な指標はない。しかし、深川ゼミナールとのインターゼミナールに参加した学生との会話や、彼らが洞口ゼミナールの掲示板に書き込む感想からは、満足度が高いことがわかった。それ以降、各学年でのインターゼミナールを計画した。

2000年から01年にかけて新たなインターゼミナールを開始できなかったのは、2000年10月に“Japanese Foreign Direct Investment and Structural Change in the East Asian Industrial System: Global Restructuring for the 21st Century,”という国際シンポジウムを開催し、2001年にかけて英文書籍の出版・編集を行っていたという事情がある⁴⁾。ゼミナールの学生諸君にも、国際シンポジウムの受付といった作業を手伝ってもらった。

2002年には、洞口ゼミナール2年生のために、井沢直也教授の教える宝仙短期大学との交流会を

行った。井沢教授とは1993年から95年までフィリピンの現地調査で一緒にさせて頂いた。宝仙短期大学を選んだ理由は、次のようなものである。すなわち、短期大学の学生は2年次修了の時点で就職をする。一方では四年制大学の学生にとっての二年次とは、大学生活に慣れて、アルバイトに精を出す時期である。四年制大学の学生が、社会に出る準備をしている短大生の考え方を知ることは、自らと社会とのかかわりについて自覚する端緒になるのではないかと想像したのである。もちろん、共同研究で知り合った井沢教授のお人柄も、インターゼミナール開始の大きな理由であった。

井沢教授が、いわき明星大学に転出されたために、宝仙短期大学とのインターゼミは2年間で終了した。翌2004年は、武蔵大学・板垣博教授の指導される2年生とのインターゼミを行った。板垣教授には、筆者が大学院生の時代に、日本企業の国際経営に関する研究を通じてご指導を頂いた。

慶應義塾大学

2002年には、洞口ゼミナール4年生のために、慶應義塾大学・高橋美樹教授の研究室(ゼミナール)とのインターゼミナールを準備した。高橋教授とは、東京大学大学院で教鞭をとっておられた植草益教授(当時)の大学院博士課程の授業で机を並べた経験があった。宝仙短期大学に比較すると、慶應義塾大学とのインターゼミナールを開始する

ことを洞口ゼミナールの学生諸君に打診したときの反応は、「凍りついた」感じであったことは記録しておくべきかもしれない。ゼミナール学生の誰も、それを「したい」とも、「したくない」とも発言しなかったので本音はわからないが、さほど嬉しいことでもなかったのではないかと推測している。

2年間にわたって青山学院大学とのインターゼミナールをした経験からは、偏差値の呪縛から離れてインターゼミナールを開催できる、という自信を与えることができたと思う。卒業論文の作成に向けて、日頃から研鑽を積んでおけば、それをパワーポイントにして発表することは難しい課題ではない。2002年の高橋研究室は3年生のグループ発表であった。したがって、高橋研究室は3年生のグループ発表、洞口ゼミナールは4年生の個人発表となった。この点に齟齬があったので、2003年度からは、洞口ゼミナールでも3年次のグループ発表をするようになった。

高橋研究室では、3年生のグループ研究の成果を、本稿冒頭で述べた商工総合研究所の懸賞論文に投稿しており、すでに入賞の実績を有していた。高橋研究室の学生諸君が作成する論文を読むと、法政大学の懸賞論文に入選する水準と遜色ないものであることがわかった。逆に言えば、法政大学学内の教授陣による法政大学懸賞論文の評価は、学外の評価と同等か、それ以上に厳しいものであることが理解できた。洞口ゼミナールの学生、あるいは、法政大学懸賞論文に入選したレベルの学生が商工総合研究所の懸賞論文に応募すれば、入賞できるであろうことは十分に予測できた。

インターゼミナールののちにコンパを開いて高橋研究室の学生と話をしてみると、高橋研究室は、慶應義塾大学商学部でも最も厳しいゼミの一つであるという評判である、とのことであった。東京大学大学院博士課程で、植草益教授(当時)に学んだ経験を共有することが、二つのゼミナールでの「厳しさ」の基盤として受け継がれているのかもしれない。

筆者のゼミナールは法政大学では厳しいという評価を得ているようであるが、法政大学で厳しいといっても「高が知れている」ものであることを学生に伝えるという意味で有効であったかもしれ

ない。もちろん、筆者が、高橋研究室による厳しい指導を好ましいと感じた、ということは記録しておくべきかもしれない。

サブゼミでのグループ研究

高橋研究室と洞口ゼミナールのインターゼミナールでは、3年生のグループ報告を行っている。グループ報告のための研究は、サブゼミを通して行われる。サブゼミは学生の自主的な勉強会であるが、洞口ゼミでは慶應義塾大学・高橋研究室への発表に向けたグループ研究の場である。輪読しか行わないゼミに比較すると、最低でも二倍勉強していることになる。サブゼミでは課題図書を与えた時期もあったが、ここ数年は2年生が新聞記事を切り抜いて報告することが好評である。

グループ研究では、2002年度から05年度までの四年間、観光、金型、環境の3グループに分けて活動を行った。これらのキーワードは、国際経営に関心が高まりそうな内容として筆者が選んだ。グループの選択は学生の希望によるので、製造業において金型が持つ重要性については、学生に説明する必要があった。

2006年度からは、三つのグループを再編成し、ベンチャー、コンサルティング、都市再開発をキーワードにグループ研究を進めている。これらのキーワードは、2005年度の二年生が自分たちで選んだものである。

2002年度から2005年度までのテーマと構成メンバーについては第16表から第18表に掲げた。二つの意味で、グループ研究に組織学習の効果が働いていることがわかる。

第一は、グループの構成メンバーが前年度から継続して参加したことによって、先輩が後輩を指導したり、研究上のノウハウを伝授するというメカニズムが働いたことである。第16表から第18表に記載したが、たとえば[S4]のように、四角で括られている番号は、前年度から継続して参加した学生を示す。グループ研究開始の時点ではゼロであったが、3年後には過半数前後が、前年度からの研究を継続していたことになる。熱心な四年生のなかには、現地調査のために自家用車を運転してくれた学生もあり、グループ研究のモチベーションを高めてくれたように思う。

第16表 グループ研究・観光班のテーマとメンバー

2002年度 「下田市における中小温泉旅館の現状 - 祭りによるイベント効果を探る - 」

4年生 : S1, S2, S3

3年生 : S4, S5

2年生 : S6, S7, S8

2003年度 「外国人旅行者獲得への戦略

- 東京都内の小規模旅館に見るホスピタリティの重要性 - 」

4年 S4, S93年 S6, S10

2年 S11, S12, S13

2004年度 「足利銀行によるリレーションシップ・バンキングの実践

温泉旅館専担チームによる地域活性化に向けた連携強化 」

4年 S6, S103年 S11, S12, S13, S14

2年 S15, S16, S17

2005年度 「過疎地域における高齢者主体の民宿経営

静岡県子浦と千葉県岩井を事例に 」

4年 S11, S12, S13, S143年 S15, S16, S17, S18, S19

2年 S20, S21, S22

(注) S4のように、四角で括られている番号は、前年度から継続して参加した学生を示す。

(出所) ゼミナールでの活動記録をもとに筆者作成。

グループ研究における組織学習の第二点は、テーマ設定にみることができる。

観光班についてみると、下田市、東京都内、足利銀行・鬼怒川温泉、下田市・子浦、という順番に調査地が推移しており、足利銀行と下田市・子浦の研究によって本稿冒頭に述べた懸賞論文を受賞している。最初の2年間は、観光産業における顧客誘致という直截なテーマ設定であったが、足利銀行と鬼怒川温泉の取材から温泉旅館のファイナンスの問題を発見し、その手法としてのリレーションシップ・バンキングについて足利銀行の専任チームから取材することができた。このステップを学生がみずから実践したことによって、研究の質が高まった。

第17表にみるように、環境班の研究テーマは、ラムネ企業の空き瓶回収、ホテルでの残飯からリサイクルされた肥料のリサイクル・システム、リサイクル商品を製造している中小企業へのインタビュー調査、環境ビジネス市場へ参入している中小企業の産学官連携というテーマ選択への経緯を辿

っている。リサイクルをキーワードとしながら、前年までの事例を参考にして新たな事例と問題意識を加えるという研究スタイルとなっている。事例発見の前提となる問題意識が、毎年、高度化していることを読み取ることができる。

第18表にまとめたように、金型班は、金型メーカーの高齢化、営業力の限界、競争戦略論からみた金型メーカーの現状整理という経緯を辿り、2005年度になって、観光班の設定した中小企業金融の分析視角を金型メーカーに応用した。すなわち、中小金型メーカーによる有効な資金調達手段を探る、というテーマ設定がそれで、サブゼミ相互の間での組織学習が働いたといえる。2005年度には、愛媛県金型メーカーへのインタビュー調査といった労力も評価されて、冒頭に述べた懸賞論文受賞につながったものと思われる。

テーマ設定における組織学習は、グループの内部という組織内での学習と、他のグループを参考にするという組織間の学習という二つの効果を持っていたことになる。

第17表 グループ研究 環境班のテーマとメンバー

2002年度	「日本における循環型社会の現状 - 中小企業ラムネ会社にもみる -」
4年生	: E1, E2
3年生	: E3
2年生	: E4, E5, E6, E7, E8, S10
2003年度	「ホテルと農家とのリサイクルにおける協力関係構築を目指して - 食品循環資源堆肥への取り組みから探る -」
4年	E3
3年	E4 , E5 , E6 , E7
2年	E9, E10, E11
2004年度	「食品リサイクルにおける新たなビジネスチャンス 新たにビジネスに取り組む際、どのような要素が必要か」
4年	E4 , E5 , E6 , E7
3年	E9 , E10 , E11 , E12, E13
2年	E14, E15, E16
2005年度	「中小企業の経営革新 環境ビジネス市場へ参入している中小企業の産学官連携」
4年	E9 , E10 , E11 , E12, E13
3年	E14 , E15 , E16 , E17, E18
2年	E19, E20

(注) E3のように、四角で括られている番号は、前年度から継続して参加した学生を示す。
(出所) セミナールでの活動記録をもとに筆者作成。

第18表 グループ研究 金型班のテーマとメンバー

2002年度	「中小製造業の現状と展望 - 金型企業へのインタビュー調査を中心に -」
4年生	: K1, K2
3年生	: K3, K4, K5, K6
2年生	: K7
2003年度	「中小金型製造企業における営業活動の役割 - 悪化している経営環境を乗り越える有効な営業活動とは -」
4年	K3 , K4 , K5 , K6 , K8
3年	K7 , K9
2年	K10
2004年度	「中小金型企業の日本国内における新たな戦略の可能性を探る ポーターの差別化戦略によって優位性を獲得することはできるのだろうか」
4年	K5 , K7 , K9
3年	K10 , K11, K12
2年	K13, K14
2005年度	「地域経済活性化と中小企業金融 中小金型メーカーによる有効な資金調達手段を探る」
4年	K10 , K11
3年	K13 , K15, K16
2年	K17

(注) K3のように、四角で括られている番号は、前年度から継続して参加した学生を示す。
(出所) セミナールでの活動記録をもとに筆者作成。

東京大学

2004年度から05年度までは、東京大学経済学部・藤本隆宏教授のゼミナールとのインターゼミナールを行った。四年生の卒業論文の作成途中に経過報告を行い、そこでのコメントをもとに卒業論文の最終作成に入ることを目的としたインターゼミナールであった。藤本教授とは、学術賞の授賞式、ハワイでの国際会議、法政大学名誉教授・下川浩一先生を介しての自動車産業研究、筆者の東京大学経済学部での非常勤講師、国際ビジネス研究学会での活動など、長年にわたって学識に触れる機会が多く、筆者自身が多くを学んできた。

インターゼミナールにおける藤本教授のコメントは、学生ひとりひとりを対象とした丁寧なものであり、また、必ず「良い点」を褒めることに注力されており、その点でも学ぶところが多かった⁵⁾。法政大学の学生のなかには、藤本教授の著作を読み、著作へのサインをお願いする学生もいたのであり、学習意欲を大いに高める効果があったと思われる。

この時期、藤本教授は、文部科学省のセンター・オブ・エクセレンス(COE)を獲得されて多忙を極めておられ、日程調整が困難なことから、東京大学・新宅純二郎ゼミナールとのインターゼミナールを開始するよう示唆して下さった。新宅純二郎助教授には、国際ビジネス研究学会で、筆者から直接インターゼミナール開催をお願いし、快諾して下さい⁶⁾。

東京大学の学生諸君は、インターゼミナールにおいて謙虚であり、法政大学の学生を認める態度において優れていた。それが、藤本隆宏教授や新宅純二郎助教授のお人柄によるものなのか、東京大学の持つ組織文化によるものなのか、学生個人の資質によるものなのか確定は難しいが、学生の立ち居振る舞いの水準をいかに高めるか、という意味で、学ぶ点が多い。

新宅助教授のコメントも、学生ひとりひとりを対象にしたものであり、丁寧で、かつ専門的水準の高いものであった。パワーポイントでのコメントには、学生の発表時点のデジタル写真が添付されており、非常に早いスピードで情報を処理されておられ、驚きとともに感心した。

法政大学と東京大学とのインターゼミナールは、

お互いの学生が大学受験の時代には「併願校」にしていなかった、という点で共通点がある。偏差値という価値基準とは異なる「何か」をぶつけることになる。お互いに行動パターンを推測できないなかで、経営学に関する論文作成という一点で交流を行う。その感想を付表4に掲げた。

上智大学

2005年からは、上智大学・竹之内ゼミナールとのインターゼミナールを開始した。国際ビジネス研究学会を通じて知己を得た上智大学・竹之内秀行助教授にインターゼミナール開催の打診をして、即座に前向きな意向を返してくれた。3年生には慶應義塾大学の高橋ゼミナールとのインターゼミナールを準備したので、対象を2年生においた。すでに述べた宝仙短期大学・井沢教授とのインターゼミナールが終了していた、という事情もあった。

上智大学では2年生からゼミナールがあり、わずかな期間で発表準備を行う学生の優れた能力をうかがわせるものであった。法政大学の側からは、2年生と3年生のゼミナール新規加入者がプレゼンテーションをした。同じ準備期間にもかかわらず、3年生の研究報告が高い水準に到達していることが感じられた。学部専門課程での授業数が増えていることは、専門分野からの考察を増やすという意味で、明らかに効果があるように思われる。

竹之内ゼミナールとは12月中旬からクリスマス前に日程を組むことが多く、「クリスマス・プレゼントの交換会」を行っている。一人500円以内のプレゼントを持って行き、インターゼミナール終了後の飲み会の席でくじ引きをして、同じ番号どおしの者が交換する、という余興である。宝くじ、石鹸、翌年のカレンダー、チョコレートなどの定番のほか、趣向を凝らした様々なプレゼントの交換が行われている。

海外合宿

洞口ゼミナールでは、過去3回海外合宿を行った。海外合宿を企画できた年には、熱心かつリーダーシップのある学生がいた。工場見学は、韓国合宿の場合には日本国内の旅行代理店でアレンジしてもらったが、基本的には、旅行代理店との折衝や工場見学先のアポイントメントも学生がとっ

ている。より具体的に言えば、学生が訪問したい海外企業を探し、電話で申し込みをして連絡先窓口を教えてもらい、そののちに洞口が添削を加えた工場見学の申込書を送付する、という手順になる。

1998年3月の韓国合宿では、大宇自動車工場と三星の電機工場を見学した。アジア通貨危機の直後ではあったが、ラインは稼動しており、巨大工場内の直行ベルトコンベヤ・ラインは印象的であった。当時、韓国からの留学生がおり、公共のバスの後部に「IMF」の文字が見えたので訳してもらったところ「IMFの管理をはやく脱却しよう」という意味のスローガンであった。大宇自動車では東欧への海外展開が行われているという説明があり、三星電子ではテレビの生産が行われていた。

2001年9月10日から14日には、香港で合宿を行った。キャノン珠海工場(中華人民共和国広東省珠海市)とリコー深?工場(中華人民共和国広東省深?市福田区)での工場見学を行った。キャノンではセル生産方式を導入しており、リコーではベルトコンベヤ方式でコピー機械を製造していた。キャノン珠海工場の従業員数は4310名、リコーは1990名であった。また、香港金融庁にも訪問し、活動についてのプレゼンテーションを受けることができた。

以上、二回の海外合宿では希望者による参加を募ったが、結果的にほぼ全員参加となった。どちらも旅行代理店を通じてツアー旅行に参加し、自由時間に工場を見学した。香港合宿の最中、2001年9月11日にはアメリカでの同時多発テロが発生し、洞口ゼミナールの利用した香港までの往路がアメリカ系航空会社であったために帰国便がなくなった。幸いなことに、ツアーに参加していたために、旅行代理店で代替となるイギリス系航空会社の便に無料で変更することができ、帰国は数時間の遅れにとどまった。もしも、飛行便とホテルを自分たちで手配していたとすれば、帰国便は自費で探さねばならなかったであろう。香港では、体調を崩して医者連れて行った学生もいたのであり、旅行保険の大切さと同時に、海外合宿のリスクも同時に感じた。

2003年度には、法政大学国際交流センターと法政大学国際交流基金(HIF)によって「学部ゼミ海外大学交流助成制度」ができた。その第一回の助成を受けて、タイでの合宿を行うことができた。

2004年2月29日から3月6日までである。合宿としては比較的長期の日程であること、事前の準備がたいへんであること、現地日程が厳しいものであること、などの理由から任意参加としたが、4年生3名、3年生3名、2年生3名の9名の参加を得て合宿を行った。このタイ合宿に参加した4年生3名は、上記の香港合宿の参加者であり、製造業の現場比較に関心をもっていた。また、上記のグループ研究では「金型班」と「観光班」に属する学生が多く、その視点を国際的に比較する形で調査の計画を練った。

ジェットロ・バンコクセンターにおけるタイ経済についてのレクチャー、バンコクの寺院における外国人観光客からのアンケート調査、キャノン・エンジニアリング、デンソー・ツール・アンド・ダイ、ソニー・アユタヤ工場、トヨタ・ゲートウェイ工場への訪問、タマサート大学経済学部・ターマビット・トゥルドウドムサム教授の大学院生ゼミナールとの英語プレゼンテーション、バンコク・カオサンロードでの宿泊施設インタビューなどの活動を行った。バンコク・カオサンロードでの宿泊施設インタビューは、タマサート大学の大学院生によるボランティアを得て、タイ語から英語への通訳を得ることができた。

ターマビット教授は、上に記した“Japanese Foreign Direct Investment and Structural Change in the East Asian Industrial System: Global Restructuring for the 21st Century,”という国際シンポジウムの招聘研究者であり、2000年10月に日本に招待していた⁷⁾。バンコクには「ゲスト・ハウス」と呼ばれる外国人専用の宿泊施設があるが、その調査を行うことで、日本国内への外国人観光客増加の方途を論じていた「観光班」の議論を再度検討することができた。工場見学の記録とあわせて、報告書を作成した⁸⁾。

英語教育の到達点

2006年度の4年生のなかには、SAの短期留学を経た学生が1名、SA長期留学を経た学生が1名、私費留学をした学生が1名おり、合宿などでの英語の会話力には高いものが認められた。また中国からの留学生2名は英語力も高かった。4年生の在籍者10名のうち、5名が英語でのプレゼンター

ション能力を身につけていたので、英語でのインターゼミナールが可能であると予測できた。

海外合宿をしたいという学生の意向もあり、韓国の延世大学、高麗大学などの教授とコンタクトをとったが、日程的に調整が難しかった。国際ビジネス研究会で知己となっていた上智大学のハギリアン・パリッサ助教のご協力を得て、彼女の教える大学院修士課程のゼミナール学生とインターゼミナールを行うことができた。上智大学の諸君は、アメリカ、アジア、ヨーロッパからの留学生であり、法政大学の学生とともに英語でのレポート報告を行った。

インターゼミナールの効果

インターゼミナールの効果は絶大である。ゼミ

ナールの性格が180度変化すると言ってもよいと感じている。

第一に、インターゼミナールを開催することで、教授の役割が変化する。インターゼミナールを行わない場合、教授が唯一最大の評価者であり、卒業への門番(ゲートキーパー)の役割を担っている。自信のない学生にとっては、閻魔様に見えるかもしれない。インターゼミナールを開催すると、門番ないし閻魔様の役割から、コーチへと役割が変化する。

コーチとしての教授は「より良いプレゼンテーション」を行うためのアドバイスを行うことである。教授は、学生の味方になる。ゲートキーパーであろうと、コーチであろうと、学生の成長を望む気持ちには変わりがないが、しかし、方法論によって意味は変化する。

第19表 上智大学大学院ハギリアン・ゼミとのインターゼミナール概要

開催日時：平成19年 1月19日(金) 15時より
開催場所：法政大学 市ヶ谷キャンパス ポアソナードタワー

タイムテーブル

上智大学パリッサ・ハギリアンゼミ(発表10分・質疑5分)

法政大学洞口治夫ゼミ(発表20分・質疑10分)

15:00 ~ 15:05	開会の挨拶(ハギリアンゼミ・洞口ゼミ)
15:05 ~ 15:20	ハギリアン Alex「Airbus Case Study」
15:20 ~ 15:50	洞口 環境班(福山将人・森山周平・吉田翔太) “Business Innovation of Recycling Industry in Japan: Industry-University Cooperation among Small and Medium Enterprises in Environment Industry-”
15:50 ~ 16:05	ハギリアン Stefan Hauschild「Dusk at Dell」
16:05 ~ 16:20	ハギリアン Daniel Thomas Roy「Daimler Chrysler AG」
16:20 ~ 16:25	休憩
16:25 ~ 16:55	洞口 観光班(劉麗萍・新橋忠久・張毅) “The Management of Family Owned Hotel by Senior Citizens in Under-populated Area: Some Cases of Family Owned Hotel in Shizuoka and Chiba Prefecture”
16:55 ~ 17:10	ハギリアン James Leu “Nintendo: Expanding in a Shrinking Market”
17:10 ~ 17:25	ハギリアン Adrienne Leong “Dell Online: Selling Direct to Customers”
17:25 ~ 17:40	ハギリアン Jane “Culture Convenience Club: A Brick to Click Success Story”
17:40 ~ 17:45	休憩
17:45 ~ 18:15	洞口 金型班(内田貴也・加瀬諒輔・久保尚矢・土屋有弘) “Promoting Regional Economies through Small Enterprises Finance: Some cases of small mold manufactures in Japan”
18:15 ~ 18:30	ハギリアン Michael J. Chen “Uniqlo-goes International”
18:30 ~ 18:45	ハギリアン Leonard Le “PricewaterhouseCoopers Aarata”
18:45 ~ 19:00	ハギリアン Adam Walls “JAL?A Makeover For the Twenty-first Century”

懇 親 会

(出所) ゼミナールでの活動記録をもとに筆者作成。

第二に、プレゼンテーションの評価者も、教授ではなく、そこに参加する学生たちに变化する。成績評価とはかかわりなく、学生どうしの相互評価が重要になる。プレゼンテーションを行えば、「良い報告」と「そうでもない報告」の差を見抜くことが容易であることがわかる。報告のためにかけた時間を推定することは、容易な作業である。

第三に、教授によるコーチングの技法の差異が、学生の最終報告に与える影響の大きさがわかる。「高い水準の研究とは何か」についての道標を示す役割、インタビュー内容、統計データのまとめ方、文献の読み方についての技法を教える役割が求められる。コーチングによって、具体的に学生のプレゼンテーションの水準が高まるのが学生に看取されれば、コーチのアドバイスを真摯に受け止める契機となる。インターゼミナールの開催によって、学生は、他大学において優れた指導を行うゼミナールと、そうではないゼミナールを判別することができる。

第四に、インターゼミナールを行うことによって、クラス授業、学部での成績といった狭い範囲での「優秀さ」ではなく、より広い視野をもった研鑽への道が開かれる。慶應義塾大学・高橋研究会とのインターゼミナールはすでに5年間継続しているが、学生諸君の報告内容と視点の斬新さについては、いつも驚かされる。二つのゼミナールの学生諸君は、夏休みを返上して調査を行い、サブゼミでの輪読を行って、インターゼミナール当日を迎える。論文作成という孤独な作業を進めるうえで、グループワークを行い、対外的な発表の場を持つことは、モチベーションの維持につながっていると考えられる。

付表4には、東京大学とのインターゼミを終えて、法政大学と東京大学の参加学生諸君から集めた感想をまとめた。自分自身の卒業論文をインターゼミで報告して、自信を深めた学生とカルチャーショックを感じた学生がいたことがわかる。

大学入試時点での偏差値の差は、二つの意味で誤解を生みやすい。第一は、偏差値の差が量的な差であって、質的な差の広がりをつまえていないことである。たとえば、見知らぬ人にインタビューをする能力の有無と、その能力の開発可能性は、大学受験科目では捉えきれない。第二は、偏差値

の差にみられる量的な差は、大学4年間で逆転可能であるのだが、その点に気づいている学生が多くはない、という事実である。英語力などはその典型であって、高校までに海外に留学した学生が海外帰国子女枠で大学に進学できるのと同様、大学で留学を経験すれば読み・書き・聞くことのできる英語力を身につけることも可能である。すなわち、偏差値によって現れた量的な差も大学生活四年間のなかで逆転可能である。大学として大切なのは、そうしたチャンスをとだけ学生に準備できているか、にある。

インターゼミナールの開催は、教授である筆者自身にとっても、いくつかの教訓を与えてくれた。

第一に、学会活動が研究成果の報告の場だけではなく、筆者の属する国際ビジネス研究会などを通じてインターゼミナール開催の打診をしてきたが、即座に前向きな意向を返してくれる教授が多い⁹⁾。「他流試合」が学生のモチベーションを高めると同時に、教育水準を維持・向上させるという意味で、教授にとっても刺激となる。学会が重要なインターゼミナールのパートナー探しの場となる。学会が研究の場であると同時に、教育の場としての役割を果たし始めるのである。

第二は、プレゼンテーションをしてくれた学生諸君を、「いかに褒めるか」に腐心するようになったことである。自分のゼミナール学生には、日頃、辛口のコメントをすることに慣れているのだが、その同じトーンを他大学の学生諸君に向けるわけにもいかない。教員として紳士的なコメントとはなにか、真の意味での寛大さとはなにか、などを真剣に考える場となった。

結語と課題

法政大学の一時間目は、朝9時30分にはじまる。正確な統計をとったわけではないので印象論にすぎないが、始業時刻前にJR飯田橋駅から法政大学に向かう人の波は、10年ほど前よりも確実に増えていると感ずる。学ぶことに積極的な学生、大学の授業に知的な期待を高める学生が増えているように思う。

その一方では、学生食堂のなかでの喫煙や、食

器の持ち出しなど、基本的な社会生活のマナーが守られていない、と感ずることも多い。法政大学の規模を前提にすれば、優れた学生とマナーのない学生が混在していることは避けようのない事実であろうが、教育の側も、まさに分水嶺を迎えていると言ってもよい。学ぶ学生を増やす仕組みづくりと、学ぶ学生の満足度をいかに高めるか、に意識的な努力を払わねばならない。

本稿に紹介した筆者の経験が影響を及ぼしてきた範囲は、年間10名たらずの学部学生にすぎない。卒業論文の指導を通じたりベラル・アーツの探求が積み重ねられていくことによって、大学教育への社会的評価が高まっていくことを期待したいが、個人単独の試みによって大学教育の質が高められたと社会的に認知されることもまた難しい。以下では、法政大学を事例として残された課題をまとめておきたい。

(1) 残された課題

マスプロ教育からの脱却

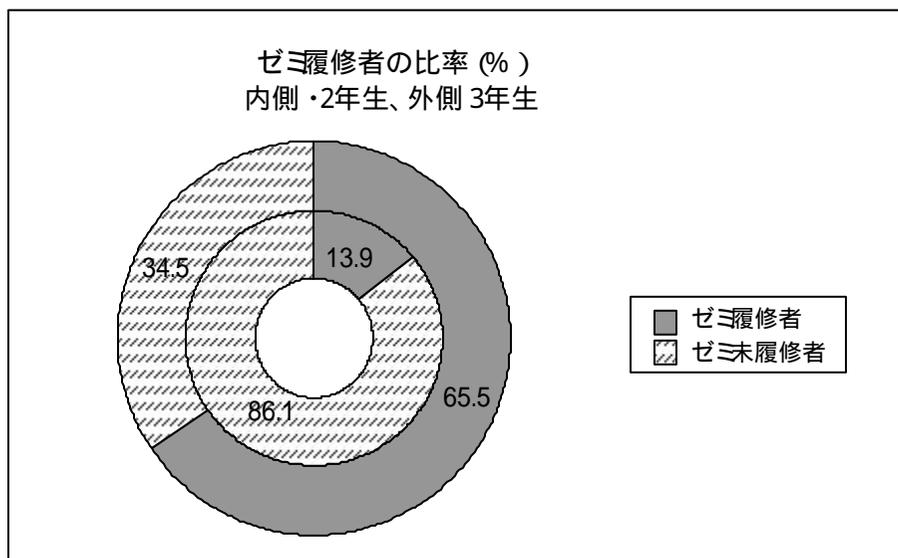
法政大学の教育は、1960年代のいわゆる「マスプロ教育」の名残りをとどめている。本稿第1節

に記したとおり、法政大学経営学部は1学年800人程度からなり、それは2003年に経営学部経営学科のみの単科から3学科に改編しても、完全には解消されていない。

2006年7月には、法政大学経営学部2年生および3年生の一部に対するサンプル・サーベイを行った¹⁰⁾が、その際のゼミ履修者の比率は第2図に示したとおりである。

この回答者に対して、ゼミナールに入っていない理由を3年生に尋ねたのが第3図である。複数回答であることに注意して数字を読み取ると以下のような傾向があることがわかる。「入ゼミ試験は受けたが、不合格になったため」という回答が6.9%あり、886人の在学生数を前提として試算すれば約61人の学生はゼミナールでの学習意欲がありながら、果たせなかったことになる。こうした学生の希望したゼミナールが、どのように分散しているのかを調べていないので、いくつのゼミで不合格になったのかを知ることはできない。たとえば、1つのゼミナールで61人が不合格になったのか、40のゼミナールで不合格になった学生の合計が61人になったのかを知ることはできない。

第2図 アンケートに占めるゼミ未履修者の比率



出所：洞口ゼミナールの学生諸君による経営学部学生に対するアンケート調査をもとに筆者作成（2006年7月）

「入りたいゼミがなかったため」と回答したのは、11.5%であった。推定値を求めれば、1学年あたり約101人程度が回答していることになる。「入ゼミ試験は受けたが、不合格になったため」と回答した学生は、他のゼミを受験する機会があったはずなので、仮にこの回答がすべて重複しているとすれば、約50名程度が、ゼミナールの受験をする前に「入りたいゼミがない」と判断していることになる。

以上の二つの回答は、学生の側にゼミナールで勉強したいという意志があることが認められる一方で、大学側にその準備がないという意味で、教科配置のミスマッチから生まれるゼミナール未履修者の存在を示唆している。

ミスマッチの生まれる要因として推測されるのは、以下の諸点である。

第一に、3年次から専門課程がはじまり、2年次後期にゼミナールの選抜が行われることを考えると、ゼミナールの内容を知らないまま、大学2年生の知識レベルを前提として「入りたい」か、否かが判定されていることになる。

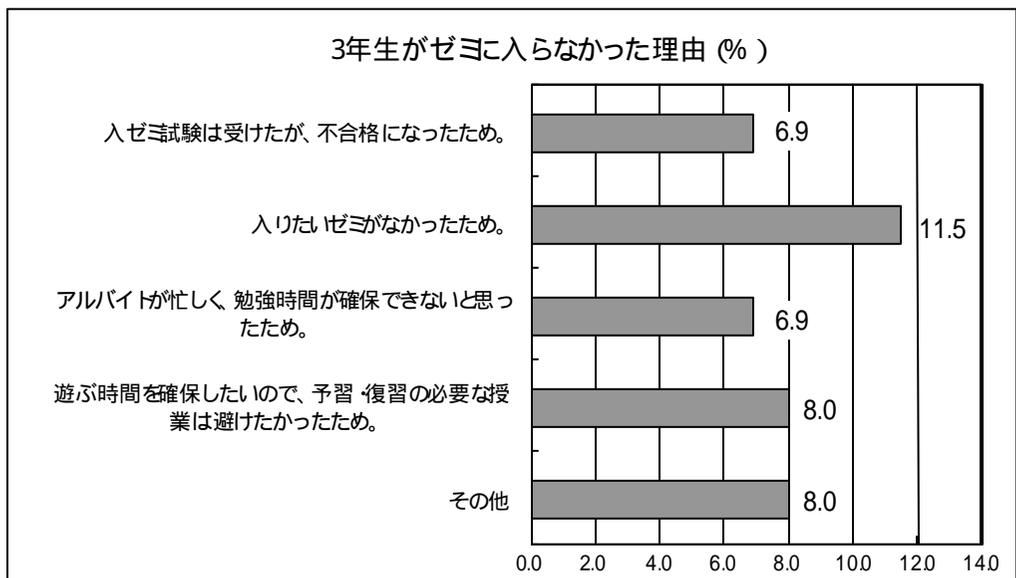
第二に、学生の側で科目の内容を理解する機会が乏しく、また、各科目の内容について理解する

チャンスがないことが挙げられる。この場合には、学習を必要としない「語感」としてのゼミナール科目名や、学生どおしの噂に左右されてゼミナールを選択する、という傾向が生まれるかもしれない。逆に言えば、学部の提供するカリキュラムに関する教授陣のオリエンテーションが不足しているのかもしれない。

第三に、学生の側に明確な学習目標があると仮定すれば、大学側の揃えるスタッフでは、量的にその需要を満たしていないのかもしれない。専任と非常勤という従来の二分法による教員組織ではなく、任期付き教員によるゼミナールの担当によって、学生の学びたい領域を試験的に増加していく、という試みによってのみ解消できる需給ギャップが存在しているのかもしれない。

こうしたミスマッチ型のゼミナール未履修に加えて、「アルバイトが忙しく、勉強時間が確保できないと思ったため」が6.9%、「遊ぶ時間を確保したいので、予習・復習の必要な授業は避けたかったため」という回答が8.0%あった。こうした回答は、大学の準備したカリキュラムとは、かなりの程度独立した要因によるものであろう。

第3図 ゼミ未履修者がゼミに入らなかった理由



出所：洞口ゼミナールの学生諸君による経営学部学生に対するアンケート調査をもとに筆者作成（2006年7月）

(2) ファカルティ・ディベロップメントの地平 学部教育の目標

黒川[2006a]は次のように書いている。「一流大学といわれるトップはいかに学部教育に魅力を持たせ、多くの社会分野で国の、そして世界のリーダーになるような卒業生を送り出すか、ここに努力を集中している。私が個人的に話をした人たち、たとえば Cambridge, Yale, MIT の学長もしかりであった。大学院や研究などの競争は当然のことで、問題にしているようではなかった。」(p.35)

黒川[2006b]の強調点は示唆的である。

「高等教育機関の大学の役割はきわめて重要であろう。研究の場でもあるが、研究者ばかり育てているわけではない。社会の種々の職種の多彩な人材を育てるところである。だからこそ、国際人材競争の時代、世界の「一流大学」、たとえば Princeton, Cambridge, Harvard 等々、そして世界の「一流」を目指す大学は世界の若者をひきつける場所になろうと学部教育に力を入れ、教員の学部教育への要求を高めている。そこへ世界中の意欲ある若者が集まる、大学の評価が高くなる、優れた教師が集まる、大学も好循環を形成する。」(p.512)

大学は、何によって評価されるべきか。第一は、研究である。第二は、大学教育である。第三は、大学の管理運営である¹¹⁾。

研究者の質は外部から判断可能であって、研究業績をみれば一目瞭然である。レフェリー付きの英文学術雑誌に掲載された論文の数、同じく和文での査読つき論文の数、英語・日本語での単著、それらの引用回数と著作への評価、学会賞や研究資金の獲得状況など、いくつかの指標で数量化することも可能である。しかし、日本の場合には終身雇用権の獲得は入職時点の一回限りの審査によって決定されるので、奉職後の研究業績にみるべきものがなくとも大学教員が職を失うことはない。

大学教員の授業評価は、すでに多くの大学で導入されている。法政大学においても、1990年代前半の夜間社会人向け大学院での導入を嚆矢として、学部授業でも導入されるようになった。すでに大学教育の不可欠な一部分となった感があり、授業評価導入の賛否両論が戦わされていたことも過去のことになりつつある。

授業評価導入によって、大学教員の授業方法に対する学生の声が聞こえるようになったことは、重要な貢献である。かりに、授業評価によって評価できないものがあるとすれば、それは、評価方法自体が減点法によっていることである¹²⁾。法政大学の場合であれば、5点を満点とした点数評価であり、そのために、新しい試み、独創的な教育方法、学生が作成した論文による学術賞獲得など、具体的な貢献を行ったとしても、5以上に評価されることはありえない。減点法による評価方法は、安定した品質管理に貢献し、質の悪い教育を排除するという効果があるかもしれない。しかし、プラス・アルファを備えた授業を求める独創性への希求が、大学教育に求められる課題であると考えられる。

退官記念論文集で教育のノウハウが開陳されることがあり、教育を考えさせる貴重な機会を与えてくれる¹³⁾が、10年に一度くらいは、現役の教授が、本稿のように自由記載の方法で教育実践報告をまとめて公表する¹⁴⁾、という工夫が考えられてもよいかもしれない。

大学教員の能力開発

大学教員の能力開発は、重要な課題である¹⁵⁾。それは、「学生の能力を開発する能力の開発」という意味で、二重性を有している。日本の多くの大学教員には、教育と研究という成果の評価がなく、研究方法と教育方法が劣化しているか、あるいは高度化しているか、を評価されることもない。その意味で、極めて危険な職業である。5年間、同じ教育方法を採用していたとしても、なにも咎められることはない。

本稿では、主としてゼミナール運営の特徴を記録してきた。そのなかで、大学教育において再認識されるべき重要な価値基準と、加えられるべき工夫をまとめておきたい。以下に要約する。

(1) 新たな活動を試みる

大学教育において第一に必要なことは、新たな試みを追加することである。やるべき基礎的な学習の時間数は維持しつつ、輪読するテキスト、訪問する工場、インターゼミナール、海外合宿など、新たな試みを続けることである。それは学生の自主

性をひきだし、教師にとって教育方法の発見を生む。

2007年度、筆者のゼミナールで開始した新たな試みは、民間企業や団体との交流である。2007年4月24日にはIBMコンサルティングへの企業訪問を行ない、国際的なコンサルティング業務についてのレクチャーを受けた。また7月には川口商工会議所において洞口ゼミナールによるグループ研究のプレゼンテーションを行った。大学間のインターゼミナールによって基礎的な知識の学習が一定水準に達した4年生が、一般社会人からのコメントをもらうことが目的である。こうした対企業との交流という試みについては、今後、数年を経てから詳細を報告できるものと思う¹⁶⁾。

(2) 学びのインフラストラクチャーを積極的に利用する

法政大学には学内懸賞論文の制度がある。図書館では論文検索システムやデータベースを利用可能である。ゼミナールに所属すれば、パワーポイントの利用、インタビューの仕方など、多くの学びの技術を知ることができる。

学外懸賞論文も重要な学びのインフラストラクチャーであり、その意味で商工総合研究所に感謝しなければならない。

中小企業研究以外の領域で学外懸賞論文として大学生を対象としたものには、電通の主催する「学生広告論文電通賞」がある。個人の部、団体の部があり、それぞれ1位から3位と佳作1席から3席までの6名ないし6グループが表彰されている。2006年に発表された第58回の実績をみると、個人の部では早稲田大学3名、慶應義塾大学、青山学院大学、東京大学が入賞しており、団体の部では上智大学から2グループ、青山学院大学、早稲田大学、東洋大学、筑波大学が入賞している。大学教員のゼミナール名を冠していると考えられるものが3グループ、学生の任意団体と考えられるものが3グループであった¹⁷⁾。法政大学経営学部にも複数のマーケティング関係のゼミナールがあるので、応募・入賞を期待したいところである¹⁸⁾。

(3) 添削する

社会科学系の大学教育では、添削が重要である。筆者のゼミナール学生諸君は、極めて熱心に卒業

論文の作成に取り組んできた。教育側の努力として必要なのは、学生の書いた原稿を添削する、という地道な作業である。卒業論文を集めて印刷し、製本するだけでは教育と呼ぶことはできない。この添削作業の量が、ゼミナールの参加学生数の上限を定める。丁寧な添削作業を前提とすれば、25人程度の学生数でもかなりの作業量になり、後期の授業期間から試験期間に至る時間で論文に仕上げには無理がある。1月下旬から2月上旬の試験期間を終えたのち、春休み期間中に添削をし、論文の推敲を学生自身に行わせる必要がある。

うまい添削と、下手な添削があるはずである。ファカルティ・ディベロップメントに要請されるのは、うまい添削を行う多数の教授を育て、添削をしない教授を無くすことである。うまい添削をする教授の指導を受けた学生は、よい論文を書く能力を身につける¹⁹⁾。よい論文を書ければ、論理的な文書が書ける。懸賞論文の制度があれば、入選もできるであろう。

うまい添削を受けることができる場合は、本来、大学・大学院である。その教育をすでに経過してしまった大学教員が、自らの文書に添削を受ける機会を得るにはどうすればよいか。第一は、査読つき学術雑誌に自らの論文を提出することである。そこでは研究者からのコメントがもらえる。第二は、ピア・レビュー、すなわち、同僚の教員、研究グループを組む教員らと自らの原稿を「回し読み」することである。

(4) 交流する

工場見学とインターセミナーは、ともに大学の枠を越えた交流であることに意味がある。大学という場でテキストだけを読むとすれば、大学教員その人を超越することのできない仕組みで思考することになる。インターセミナーで他大学と交流することによって、「同じ学年なのに優れている」という学生を目の当たりにすることもできる。また、大学教員の思考の枠組みを超えた事実にも圧倒されることもあるはずである。

工場見学で「現場」を見ることによって、様々な職能に打ち込む人々と話をするができる。工場見学の担当者にとどのような質問をするか、が訪問する大学生の知的水準を示し、どのような回

答が返ってくるので企業側の姿勢が明らかになる。工場見学での質疑応答は、真剣勝負の場である。ときには、工場見学の案内担当者から「大学生なのに、知らないんですか」と直接的に厳しく尋ねられることもある。そうした企業側担当者の態度によって、社会が大学に向ける目を知ることもできる。

これから本格的に開始していく企業人との交流も多いに楽しみである。

(5) 帰属意識を高める OB・OG会の状況

たとえば、2007年5月から6月にかけては、卒業後3年になるアメリカ赴任中の大手印刷メーカー勤務の卒業生、卒業後12年になるインドネシア在住の電気製品輸入を行う元インドネシア留学生、卒業後13年になるドイツ在住のロジスティクス企業勤務の卒業生らが筆者の研究室を訪ねてくれた。そのたびに現役学生に紹介し、飲み会なども開いている。筆者のゼミナールには、韓国、中国、台湾、マレーシア、インドネシアからの留学生を迎えることができ、彼ら、彼女らも国際的に活躍している。

毎年7月前後にはOB・OG会を開催している。現役学生の諸君に準備をしてもらうことにしている。現在までのところ、OB・OGの側から開催の企画が生まれたことはない。幹事役を引き受けるOB・OGはいない²⁰⁾。OB・OGの参加者は、例年25名から30名前後であり、興味深いことに、この数字は毎年卒業生が増えているはずでありながらも変化がない。参加者は、卒業時点を起点として指数的に減少するようである。仕事や家庭の忙しさもあるであろう。時とともに参加確率は下がるものであるらしい。

大学のステータスは、卒業生の活躍によって決まる。彼ら、彼女らが自慢話をしてくれる場としてOB・OG会を設定している。そのことによって現役学生諸君のモチベーションと帰属意識が高まること期待している。毎年、楽しい会を開催することができることに感謝したい。今後、OB・OG会をさらに盛会とするための努力をしたいと考えている。すなわち、より具体的には、卒業生が自慢できる法政大学を創ることを目指して今後も努力したいと思う。

注

- 1) インターゼミナールをはじめることができなかった理由としては、筆者が法政大学の在外研究によってアメリカに滞在していたことがある。1994年夏から96年夏までであり、その間、郭賢泰氏、平川均教授(現在名古屋大学)におまかせしたために、インターゼミナールの機会をもてなかった。97年から99年までは、ゼミのなかでの報告会を設けていた。
- 2) 第三の理由がある。私事にわたるが、1991年と93年に生まれた私の子供たちが、1999年当時、ピアノの発表会に向けて練習していたことがある。「発表の機会」を与えることが教師の重要な務めではないか、と感じさせてくれたのである。インターゼミナールを開始して振り返ると、その点にはやく気づくべきであったと思う。
- 3) 深川教授は現在、早稲田大学に奉職しておられる。
- 4) 洞口・下川(Horaguchi and Shimokawa, [2002])としてまとめた。
- 5) 対極に位置するのは、慶應義塾大学・法政大学のインターゼミナールであって、商工総合研究所から賞をもらって「褒められる」ことを前提に、限られた時間のなかで「辛口」のコメントをする場合が多かった。
- 6) 新宅純二郎助教授は、法政大学経営学部(大学院イノベーション・マネジメント研究科)・小川孔輔教授と共同研究をされておられた時期があり、法政大学には親近感を持って下さったようである。筆者が特に意図したわけではなかったが、藤本教授と下川教授、新宅助教授と小川教授という学問的なネットワークに「包まれて」、筆者がインターゼミナールを開催できたことになるのかもしれない。
- 7) こうした経験からは、ハーシュマンのトリックル・ダウン(均霑)効果という単語を思い浮かべる。研究活動における国際交流が、大学教育における国際交流に均霑していくのであり、日ごろの研究活動が、いかに重要かがわかる。
- 8) 法政大学経営学部経営学科洞口ゼミナール『2003年度 HIF(法政大学国際交流基金)学部ゼミ海外大学交流助成制度 タイ現地調査報告書』2004年(法政大学図書館蔵)。工場のアポ取りなどは参加者9名が分担して行った。海外合宿を企画してくれた学生諸君の就職先は、例外なく有名な大企業ないし政府

系金融機関であった。

- 9) 将来の開催を約束したものの、いまだに実現していないゼミナールもある。関西学院大学の藤沢武史教授のゼミナールであり、東西からの交通費の壁があつて実現に至っていない。今後の課題であるとともに、その機会を楽しみにしている。
- 10) 洞口ゼミナール 4年生の田中法臣君には、アンケート調査においてお世話になった。田中君を中心とした洞口ゼミナールのメンバーが、クラス授業に行つてアンケート調査を行った。ここに記して感謝したい。
- 11) 大学教員が果たすべき大学の管理責任について言えば、必要な職務について、「私はできません」、「私はやりません」と断つていても、罰則規定もなければ昇進の遅れが生ずることもない。大学教員の研究能力の格差は、計り知れず大きい。教育、管理に対する責任の負い方にも大きなばらつきがある。
- 12) なにも確たる成果を挙げなかった学生の行う授業評価が何を意味するかを考えてみるとわかる。どれほど欠席した学生でも授業評価をする権利は与えられている。学生の授業評価で高い得点を獲得するに越したことはないが、本来的に重要なのは、より高い学習成果を挙げる学生を育てることであつて、大学教員が高い評価を得ることを目的にしてしまつては、本末転倒ということになる。
- 13) 小宮[2003]には、「演習30年の回顧」、「小宮ゼミの一年」といった章が割かれており、大学教育の方法論として参考になる。また、「学者の最盛期」という一章も設けられており、真摯に、時間を大切に研究することの重要性を感じさせる。
- 14) 一寸木[1997]は、その例外であつて、「経営学原理」という科目の担当者として経営学教育を論じている。「大学における教育の重要性の認識とその改善の提案については、すでにいくつもの著書が刊行されている。アメリカではこの問題について大きな関心もたれており、研究が蓄積されている。日本の大学では、従来、教育よりも研究が重視されており、教育のやり方や教育方法に関してそれほど多くの「研究」がなされてきたようには思えないが、わが国でも近年、大学における教育問題を本格的に考える必要性が高まっているようにみえる。」(p.85) 筆者は、本稿において、参与観察という方法にもとづく大学教育方法の研究を目指した。それが成功しているか否かは、本稿の読者に判断を委ねたい。
- 15) 法政大学 FD 推進センター[2007]にまとめられているように、法政大学の各教授が様々な工夫を凝らしており、参考になる点が多い。ただしハンドブック形式という紙幅の関係からであろうが、「ノウハウ」の紹介になっている点があり、3年、5年、10年、15年という長期の継続的な教育努力の積み上げの重要性にまで視点が及んでいない。本稿で意図しているのは、その点にある。4年間で大学生の在籍期間であり、2年から3年間にわたるゼミナール教育がワン・サイクルであるとすれば、長期の視点は明らかに重要である。
- 16) エンゲストローム[1999]による活動理論、あるいは「拡張による学習」(Expansive Learning)は、筆者が行つてきたインターゼミナールや工場見学の重要性と一致した視点をもつ教育理論である。筆者は、イノベーションの研究を進めるなかで、フィンランドの教育システムに関する著作に関心をもつた。矢田・矢田[2006]はフィンランドの教育実態を紹介し、福田[2006]は教育実態とともにエンゲストロームの理論を紹介している。なお、Yamazumi, Engestrom, and Daniels[2005]をも参照されたい。
- 17) <http://www.dentsu.co.jp/news/release/2006/pdf/2006010-0223-2.pdf> を参照されたい。
- 18) 結局のところ、すべての学問分野に懸賞論文が準備されることはないであろうから、優れた学生の研究発表の場を確保するという意味では、本誌『経営志林』をレフェリー制の雑誌にして、オープンな研究発表の場にするという方法が考えられる。学部学生の卒業論文にも、掲載に足る水準に達しているものがある、と筆者は強く感じている。
- 19) ときおり製本したゼミナールの卒業論文集を頂戴することがある。しかし、なかには添削をした痕跡がない卒業論文を単に印刷して製本しただけ、と思えるものもある。図表の出所、引用論文の掲載、文体の統一など、基本的な事項を教育していない卒業論文を製本することにどのような意味があるのか、首を傾げたくなる。
- 20) この点が、法政大学卒業生の能力の限界なのかもしれない。初代から第3期くらいまでの卒業生にリーダーシップがないと、卒業生主導のOB・OG会は育たない。

< 参考文献 >

- 石黒昭博監修[2003]『総合英語 Forest』第4版, 桐原書店.
- 伊丹敬之・伊丹研究室[2001]『情報化はなぜ遅れたか』NTT出版.
- ウェーバー, マックス[1919]『職業としての学問』尾高邦雄訳, 岩波文庫, 1936年.
- エンゲストローム, ユーリア[1999]『拡張による学習活動理論によるアプローチ』新曜社.
- 清成忠男[2003]『大淘汰時代の大学自立・活性化戦略』東洋経済新報社.
- 黒川 清[2006a]「新科学技術基本計画と大学改革」『IDE 現代の高等教育』No.480, 5月号, pp.32-40.
- 黒川 清[2006b]「Science As A Foreign Policy 国の根幹は人づくり」『学術月報』第59巻第7号, pp.510-514.
- 小宮隆太郎[2003]『歩みのあと 回顧・追憶の文集』私家版.
- 一寸木俊明[1997]「『経営学原理』講義10年: 経営教育のあり方に関する試論」『経営志林』第33巻第4号, pp.73-89.
- 平澤克彦・高久保豊[2003]「経営学教育の課題と方法に関する準備的考察」『商学集志』(日本大学商学部)第72巻第3・4号合併号, pp.21-33.
- 福田誠治[2006]『競争やめたら学力世界一 フィンランド教育の成功』朝日新聞社.
- 法政大学経営学部経営学科洞口ゼミナール『2003年度HIF(法政大学国際交流基金)学部ゼミ海外大学交流助成制度 タイ現地調査報告書』2004年.
- 法政大学FD推進センター[2007]『法政大学FDハンドブック』法政大学FD推進センター.
- 洞口治夫[1998]「経営学研究のための論文作成マニュアル」法政大学産業情報センター(法政大学イノベーション・マネジメント研究センター)ワーキングペーパー, No.75, 1998年4月23日.
- 洞口治夫[2002]「マレーシアのローカル電機メーカーにおける工場管理 加工組立型産業における作業組織の観察」『グローバリズムと日本企業 組織としての多国籍企業』第6章, 東京大学出版会.
- Horaguchi, H. and Simokawa, K. [2002] Japanese Foreign Direct Investment and the East Asian Industrial System: Case Studies from the Automobile and Electronics Industries, Springer.
- 宮川幸久・綿貴陽・須貝猛敏・高松尚弘[1988]『ロイヤル英文法』旺文社.
- 宮坂純一[1996]「大学大衆化時代における経営学士教育のあり方」『産業と経済』(奈良産業大学)第11巻第1号, pp.69-92.
- 矢田龍生・矢田晶紀[2006]『ザ・フィンランド・システム』産業能率大学出版部.
- Yamazumi, Katsuhior, Engestrom Yrjo, and Daniels, Harry, [2005] New Learning Challenges: Going beyond the Industrial Age System of School and Work, Kansai University Press.
- 劉麗萍・山口翠・張毅・金子真理[2006]「過疎地域における高齢者主体の民宿経営 静岡県子浦と千葉県岩井を事例に」『日本国際観光学会論文集』第13号, pp.74-80.

付表 3

平成18年度 東京大学・法政大学インターゼミナール

開催日時：平成18年 1月29日(日) 9時30分より

開催場所：法政大学

タイムテーブル

東京大学藤本ゼミ(発表12分, 質疑 3分)

法政大学洞口ゼミ(発表12分, 質疑 3分)

9:30 ~ 9:35 挨拶(洞口ゼミ: 内田)

9:35 ~ 9:50 洞口 田口 「特定健康保険用食品の認証表示制度が商品ブランドと成分ブランドに与える影響 健康油市場における花王の持続的競争優位の源泉を探る」

9:50 ~ 10:05 洞口 石 「中国自動車市場における消費者意識 上海大衆汽車と第一汽車トヨタを事例に」

10:05 ~ 10:20 洞口 原田 「新規航空会社におけるマーケティングの必要性 大手から新規へ顧客のスイッチングを図るために必要な要因とは」

10:20 ~ 10:35 洞口 上條 「IC タグの研究開発戦略 DNPの Kids in Feel を事例として」

10:35 ~ 10:50 洞口 福島 「日本企業における燃料電池車の技術開発 企業間提携の有効性と産学連携の問題点を探る」

10:50 ~ 11:05 休憩(15分間)

11:05 ~ 11:20 洞口 山岡 「広告宣伝活動から探る資生堂のブランド認知度 なぜ、欧米諸国で知名度が低いのか」

11:20 ~ 11:35 洞口 川鍋 「記事広告『特集』の役割を探る 『ピチレモン』、『ニコラ』事例として」

11:35 ~ 11:50 洞口 西郷 「外資系企業は何を求めて立地を選択するのか 産業クラスターとディベロッパーの活動を通じて探る」

11:50 ~ 12:05 洞口 臼倉 「通信販売の物流拠点機能 延期と投機の原理から在庫位置形成をさぐる」

12:05 ~ 12:20 洞口 鈴木 「中小製造業発展のためのアウトソーシング活動 成功事例から見る発展の条件とは」

12:20 ~ 12:40 講評：藤本先生

12:40 ~ 13:35 昼食(55分間)

13:35 ~ 13:50 藤本 中島 「デジタルカメラにおける画像処理エンジンのプラットフォーム化は何をもたらしたのか」

13:50 ~ 14:05 藤本 石原 「An Additional Test of Empirical Work about Product Architecture Theory and International Trade Theory Approach via Date Augmentation」

14:05 ~ 14:20 藤本 笹川 「住宅ローンビジネスにおける業務プロセスのモジュール化」

14:20 ~ 14:35 藤本 上田 「日本の音楽配信サービス市場において、何故 iTunes Music Store が勝っているのか」

14:35 ~ 14:55 講評：洞口先生

14:55 ~ 15:00 挨拶(洞口ゼミ: 宮内)

役割分担

司会・田中, 久保

タイムキーパー・山口, 福山

PC 操作・内田

出迎え・宮内, 吉田

買出し・森山, 金子

椅子出し・張, 劉

懇親会幹事・加瀬

懇親会

(出所) ゼミナールでの活動記録をもとに筆者作成。

付表 4

東京大学・法政大学インターゼミナールの感想文

法政大学 (学生10名)

- 東大新宅ゼミ生とのインターゼミナールを通じて私ที่ได้られた物は、自信でした。洞口ゼミに入り、日々努力すれば対等に調査できるものだと実感したのと同時に、今後私の人生の糧にしたいと思います。
- ものすごいプレッシャーの中、洞口ゼミの4年生は皆堂々と発表していたように感じました。それは、これまで多くのインターゼミナールをこなしてきた経験と論文制作に費やしてきた多くの時間が自信となって表れていたのだと思います。また、東京大学新宅ゼミの予想通りのレベルの高さには、さすがだなと素直に思いました。
- 各大学とのインターゼミナールを通じて知的な刺激を受けることの楽しさを学びました。卒業論文やグループ研究の完成に向けての励みにもなり、得がたい友人との出会いも貴重な経験の一つだと実感しています。
- インターゼミナールでの発表を通して成長した点は、それまでの論文制作で培った「考える」段階からステップアップし、聴衆を「説得させる」力を身につけることができた点です。東京大学の学生と接し、彼らの知識の豊富さに驚かされましたが、その面々を前に臆することなく自分の考えを伝えられたことで自信になりました。この経験が今後社会人となってプレゼンの場で活かされるものだと感じています。
- インターゼミナールの発表を通して多くの意見をもらったことで、より自分の研究と向き合うことが出来ました。自分では満足していても、他の方から見れば不明な点や足りない点があり、そこを指摘して頂けたのは有難かったです。
- インターゼミナールの良かった点は、卒論について外部の学生から意見をもらえたことである。通常、卒論は同じ大学の学生や教授に評価してもらうだけであるが、インゼミを通して意見交換を行うことでより良いものが作り上げられると思う。特に、相手の新宅ゼミの学生は、自分達の研究に対する鋭いアドバイスを頂けたので、大変参考になった。
- 東京大学とのインターゼミナールは、私にとって大変有意義かつ貴重な経験であったと実感しています。インターゼミナールを通じて、東京大学の知的な学生たちに魅力を感じました。彼らの知的さというのは、単にIQの高さではなく、日々の努力で得た知識と知恵の蓄積によるものであることが、交流を通じて実感できました。そういった彼らの努力を見習い、社会人となっても、ゼミで学んだことを忘れずに努力し続ける人間になりたいです。
- 東京大学新宅ゼミナールとのインターゼミナールは、今までで一番のインターゼミナールであったと思っています。もちろん、得るものが凄く多かったという意味合いである。多くのインターゼミナールの場合、我々洞口ゼミナールの個人発表それぞれに対し、論理や結論の矛盾への突っ込みで終わってしまうのだが、新宅ゼミの学生は発表内容を即座に理解し、それに加えて今後の課題などを提示してくれる。我々洞口ゼミナールもインターゼミナールの質疑応答の際は、相手の発表を見て今後の課題を提示することもあるが、それでもごくまれなことであり、一人一人の発表をしっかりと聞いて、その都度誰かが必ず今後の課題を提示することまで行き着いている新宅ゼミの学生に驚嘆した。今後私が社会人となり、インターゼミナールで身につけた能力が活かされる場面が出てくると思うが、例えば事業についての会議などで、単に矛盾に対して意見するだけでなく、新宅ゼミの学生がそうしているように、今後の課題について提示することができれば、おのずと私より前へ進めるように思える。
- インターゼミナールを通じて、色々な人から意見をもらうことで、自分の研究の方向性と異なった視点でみるのも面白いのではないかと気づかせてくれました。大学生同士でそこまで熱く議論ができることを幸せに思いました。また新宅先生を含め、東京大学の学生はとても気さくで、大学の壁を越えて付き合える仲間になったと実感しています。
- 新宅ゼミの学生さん達の印象は、一言で言うと「理解が早い」です。少しでも矛盾点があると鋭い意見をぶつけてきましたし、初めて聞くこちらの発表をさっと聞いただけで全体像を理解して鋭い質問をしてくるあたりはさすがに頭の回転が私達よりも速いと思いました。前日の新宅ゼミの鋭い質疑を見ているだけに、自分のプレゼンテーションの時は内心少し怯えながらやっていますが、何とか乗り切れたのではないかと思います。鋭い意見は受けましたが、優秀な人からの客観的な意見をもらったことによって、今後の課題が明

確になりましたので、非常に自分のためになりました。ゼミ全体での研究の質をみても、今回のインターゼミを通じて「法政でも勉強の仕方をしっかりと学んでいけば、東大生相手でも互角にやりあえる」とも感じました。もちろん、地の頭は向こうのがはるかに良いと思いますが、論理的思考能力や、問題を発見し、それを調査、検証する力は、大学に入ってからでもつける事ができる能力なのだと感じたと同時に、社会人になってから必要とされる能力につながるものであると感じました。飲み会でも、新宅ゼミは非常に良い方ばかりで、なんでこんな頭がよいのに謙虚なのだろうという人ばかりでした。大学院の方とも交流できましたし、こういうつながりは卒業してからも続いていってほしいと思います。

東京大学 (学生 6名)

- ・ インゼミは自分たちの実力を自覚し、自分たちに足りないものを知るためのいい機会だった。学業に関しては大学の外に出ることが少ないため、今回のインゼミで自分の位置をより広い範囲の中で相対化できたと感じた。
- ・ 他大学の方と交流が出来たのはとても刺激になりました。馴れ合いではなく真剣に臨むことで、去年とはまた違ったゼミを経験できたと思います。来年からもこうした交流があれば、三年生にとっても励みになるに違いありません。
- ・ インゼミの準備は大変でした。しかし今となって考えれば卒業論文を書き上げる上で、洞口ゼミとのインゼミは論文製作の進度をあげるきっかけとしてとても重要なポイントとなりました。金型の研究をなさった洞口先生、金型を既に調べたゼミ生の方々から何うお話は私の論文にとてもよい影響を与えてくれました。本当に感謝しております。ありがとうございました。
- ・ インゼミをやることによって各大学が持つ思考の癖というのが分かりました。それはまさに異文化と触れ合うようなもので、大変刺激的でした。1つのテーマを長時間かけて議論するというのもやってみたくて思いました。
- ・ 卒論を書く上で圧倒的なモチベーションが確保できた。さらに他の大学生と接することで自分達に足りないものを改めて確認でき、その刺激が今後の人生の参考になった。また、友人としても魅力的な人間と出会えた。
- ・ ゼミを武道にたとえるとインゼミは他流試合。「外」の世界を意識することで自分たちの輪郭が浮かび上がってきたように思う。他者との関係の中に自己を見つめなおす試みは、個人だけでなく組織にも有効だと感じた。

(出所) 2007年1月に行ったアンケート調査による。東京大学・法政大学の学生代表者にインターゼミナールの感想をとりまとめてもらった。匿名のアンケート回答であり、回収は2007年2月1日である。なお、本アンケートの掲載については、東京大学・新宅純二郎助教授(現・准教授)に了解を得た(2007年6月25日)。

付表 5

平成17年度 上智大学・法政大学インターゼミナール

開催日時：平成17年12月17日(土) 10時より

開催場所：法政大学

タイムテーブル

上智大学竹之内ゼミ(発表30分, 質疑15分)

法政大学洞口ゼミ(発表12分, 質疑 3分)

10:00 ~ 10:05	挨拶(竹之内ゼミ：荒川, 洞口ゼミ：内田)
10:05 ~ 10:20	洞口 大石「中小企業が導入すべき EMS 『ISO14001』と『KES』の比較」
10:20 ~ 10:35	洞口 金子「アルバイト・パート人材の効果的な育成アプローチとは」
10:35 ~ 10:50	洞口 中田「女性正社員増加のための有効的戦略とは 女性社員における長期雇用の現状から探る」
10:50 ~ 11:05	洞口 久保「福祉用具市場におけるパラマウントベットの集中投資 なぜ多角化を推進しないのか」
11:05 ~ 11:50	竹之内 「M&A なぜ M&A は成功率が低いのに、件数が増えているのか？」
11:50 ~ 12:40	昼食(ボアソナードタワー地下 1 階, 学生食堂)
12:40 ~ 12:55	洞口 高田「規制緩和と企業に求められる有効な政策とは 株式会社の農業参入と構造改革区の活用,そして全国区へ」
12:55 ~ 13:10	洞口 山田「空港マーケティング 成田空港の商業指向戦略と新たなビジネスチャンスの可能性を探る」
13:10 ~ 13:25	洞口 田中「新規航空会社の経営戦略 広告宣伝におけるアライアンス」
13:25 ~ 14:10	竹之内 「航空業界 新規参入が難しい航空業界で新規参入は成功するのか」
14:10 ~ 14:25	休憩
14:25 ~ 14:40	洞口 福山「インターネット広告の優位性」
14:40 ~ 14:55	洞口 徳永「ミニシアターの広告戦略 ネット広告の有効性を探る」
14:55 ~ 15:10	洞口 吉田「白物家電におけるカラーマーケティングの重要性 顧客は何を求めて購入するのか」
15:10 ~ 15:55	竹之内 「保険業界」
15:55 ~ 16:10	休憩
16:10 ~ 16:25	洞口 森山「小売業のサプライ・チェーン・マネジメント イトーヨーカ堂 の物流改革を事例として」
16:25 ~ 16:40	洞口 堤下「国際戦略提携における協働 ハイアールブランド,日本市場参入の課題」
16:40 ~ 16:55	洞口 加瀬「音楽コンテンツ流通の変化 音楽配信を中心に探る」
16:55 ~ 17:15	講評：竹之内先生
17:15 ~ 17:35	講評：洞口先生
17:35 ~ 17:40	挨拶(竹之内ゼミ：荒川, 洞口ゼミ：宮内)

(出所) ゼミナールでの活動記録をもとに筆者作成。